

令和 8 年度 第一回 国営海の中道海浜公園魅力向上推進協議会

<議事要旨>

■日 時：令和 8 年 6 月 1 日（月）15：00～17：00

■場 所：国営海の中道海浜公園事務所

■主な意見等

◇協議テーマ

(1)「オールうみなかでの魅力的な飲食サービスの提供について」

- 前回協議を踏まえ、園内の全関係機関から選出されたメンバーによるプロジェクトチームにより、海の中道ならではの景観・季節感と連動したメニューとして、アサイーボウルをベースとした商品「うみなかボウル」を春のフラワーピクニックの期間に販売するとともに、当該取組に関するアンケート調査を行った。これらを踏まえ、今後の「食」に関する取組に向けた意見をいただきたい。〔園内関係機関〕
- 今回の食のプロジェクトは非常に画期的な取組と感じた。また、フォローアップについてきちんとデータを取得している点も評価できる。一方、今後、どの方向に食の取組を展開していくのか、集客の目玉とするのか、商品開発を主軸とするのか、公園全体の飲食レベルの底上げを図るのか、あるいは食そのものを風景や体験の一部として捉えるのかなど、複数の方向性が想定され、議論の余地がある。現在の公園内飲食は、唐揚げ、たこ焼き、カレーといった一般的なメニューが中心で、一定の需要はあるものではあるが、「海の中道ならではの」のものがあると体験としての魅力はさらに高まると考える。アサイーボウルはピクニック利用と親和性があり、一つの可能性である。今後、公園ならではの食のあり方について、さらに探求していくことが重要である。加えて、地域性という観点も重要である。志賀島など周辺地域の食材を活用し、地域性を感じられる飲食提供の充実も今後の重要な検討課題である。例えば、大学の食堂における地域食材を活用した期間限定メニューの提供のように、地域の事業者と連携した取組は、来訪意欲の喚起や地域ブランディングの向上につながる可能性がある。〔有識者〕
 - 地域資源の活用や地域との連携は、プロジェクトチーム内でも検討が進められている。地域食材の範囲はターゲットによって異なり、海外客には日本らしさ、国内客には九州らしさや福岡らしさ、北部九州圏や福岡市民には志賀島などの資源を活かすという考え方も出てくる。その上で、まずは志賀島など近接地域との連携が「海の中道らしさ」を表現する上でも意義が大きく、今後の取組において大事な視点と考える。〔園内関係機関〕
 - 「海の中道らしさ」の表現においては地域資源の活用が重要であり、あまおうや柿、いちじく等の福岡県産の季節食材を活かした展開も可能と考えられる。こうした地域資源については情報提供も可能であるため、今後のメニュー開発において活用を

検討いただきたい。[地方公共団体]

→地域と連携した食の活用にあたっては、周辺に既存の飲食事業者が多く存在することから、顧客を奪う形とならないよう配慮が必要である。一方で、地元食材の調達を軸とした仕組みづくりを進めることで、公園と地域が相互補完的な関係を構築できる可能性がある。また、海外来園者を意識したメニュー構成や、有田焼など九州産の陶器の活用による地域性の表現も有効である。ただし、週末中心の利用実態を踏まえ、食材管理や運営負担、コスト面とのバランスを考慮し、費用対効果を慎重に見極める必要がある。[有識者]

→プロジェクトチームにおいて、手軽さや加工品の活用といった観点から、志賀島や和白の食材を活用し、常時提供可能な商品の開発に関する議論があった。このような商品が実現できれば、「来ればいつでも買える」魅力のある提供体制の構築につながる可能性があり、今後はこうした方向性での商品開発について検討を進めていきたいと考えている。[園内関係機関]

- 広大な敷地を活かし、園内での簡易的な食材生産とそれを活用したメニュー展開といった新たな取組の可能性が考えられる。[有識者]

→園内で生産した資源の活用については可能性を感じている一方で、生産に伴うコストや労力、法的整理といった課題も想定される。このため、これらを踏まえつつ、実現可能な範囲で段階的に検討を進めていく必要がある。[園内関係機関]

→園内で生産するという発想は理想的な提案かもしれないが、神戸市では「EAT LOCAL KOBE」として地域の食を地域で楽しむ取組が進められており、その一環でファーマーズマーケット等の食のイベントも展開されている。公園単体ではなく、福岡県や福岡市等の広域的な主体との連携も重要であり、福岡市のエディブルフラワーなど、食と親和性のある地域資源を活用することで、海の中道ならではの食の魅力創出につながる可能性がある。[有識者]

- 販売数量の合計 400 個については、率直に見れば販売実績としては限定的なものであったと言わざるを得ないが、初回の取組であるためやむを得ない側面もある。一方で、うみなかボウルの在庫余剰が発生した点は課題として認識する必要がある。また、アンケート結果からは価格設定が主な要因として影響している可能性があり、ターゲットによっては高価格と受け止められている実態も踏まえ、今後は価格の見直しを含めた検討が必要である。[有識者]

→初回の取組である点を踏まえ、今後の継続的な実施により、認知度が向上し、それに伴い販売数も増加する可能性はある。また、価格に対する評価については個人での購買判断のみで捉えるべきではなく、自身では購入しない価格帯であっても、家族で来園した際は購入するといった行動も想定される。また、商品に関する背景やストーリー

一の影響も踏まえる必要がある。さらに、飲食に関する満足度の向上は、個別の商品だけでなく、関係者が一体となって取組を進めている姿勢そのものにも起因していると考えられる。本取組は中長期的な視点で継続していくことが重要である。[有識者]

→2人で1つを分けて食べることで会話が生まれるなど、体験のあり方として工夫の余地があると考えられる。価格に加え、食べるシチュエーション、提供までのプロセスや物語性も重要であることから、単に商品として提供するだけでなく、どのように食べるか、どのような体験として提供するかといった観点も含め、利用者の満足感や幸福感を高める演出についても検討していくことが望まれる。[有識者]

→関係者が前向きに一体となって取り組んでいる姿勢は非常に評価できる。また、アサイーボウルも海の中道の鮮やかな景観に映える魅力的な食である。一方で、価格帯とボリュームの観点から、食事かデザートかの位置づけが不明確である点が課題である。複数人でのシェアを想定するなど、利用シーンに応じた提供方法の工夫を検討する必要がある。特に、複数人で分け合う利用は公園との親和性が高く、展開が可能と考えられる。さらに、福岡市の進める「一人一花運動」等の施策と連携することで、食と景観を一体的に楽しむ体験の創出につながる可能性がある。[有識者]

→価格の評価は一様ではないが、どの年代をターゲットとするかが重要な課題である。幅広い層に一様に訴求することは難しく、対象層をある程度明確化することが重要である。[地方公共団体]

→どの層をターゲットとするのかを明確にすることは重要であり、その設定によって提供内容や広報手法が変わってくることも認識している。一方で、都市公園という特性上、過度に対象を限定することには難しさがあるため、今後はそのバランスについて検討を重ねて、適切な水準を見出していくことが必要である。[園内関係機関]

- 本取組が海の中道のPRにつながるという観点からは、体験と情報発信を組み合わせた展開が有効である。例えば、園内のお気に入りの場所で商品とともに撮影・共有する仕掛けや、コンテスト形式の発信など、ゲーム性を取り入れることで、景観と食の魅力を一体的に発信することが期待される。[有識者]

→食べているシーンをフォトコンテストとして展開する取組や、園内の「映える」スポットと結びつけた食べ方マップの作成など、体験と情報発信を組み合わせた施策が有効と考えられる。[有識者]

→プロジェクトチームにおいて、常設店舗と移動販売の両形態について検討を行った。利用者が集まる場所で提供し、写真撮影と一体で楽しめる形が望ましいという意見もあった一方で、今回は実施期間や運営面を踏まえ、まずは常設店舗での実施とした経緯がある。今後は、移動販売の導入も含めて関係者と協議し、改善を図りながら取組を進めていく考えである。[園内関係機関]

→既存の SNS 上でのフォトコンテストの取組も活かし、商品を手にも園内の好きな場所で撮影・発信する仕掛けやハッシュタグの活用など、SNS と連動した施策が有効と考えられる。秋のプロジェクトに向けては、SNS を活用した発信施策を組み合わせることで、より効果的な展開が期待されることから、今後検討を進めていくことが重要である。[園内関係機関]

→特に若年層の情報収集は SNS に大きく依存しているため、インフルエンサーの活用は有効な発信手法の一つである。インフルエンサーの発信力を活かすことで、行政主体とは異なる広がりや波及効果が期待される。[地方公共団体]

→一般の方を募集し、インフルエンサーとして発信を担っていただく「うみなかぐらまー」の仕組みや、SNS コンサルティングに強みを持つ事業者との連携により、専門的な発信体制の整備が進められている。今後は、関係者の助言を踏まえながら発信内容の工夫を図ることが重要である。[園内関係機関]

→YouTuber やインフルエンサーとの連携は有効であり、分かりやすさと面白さを兼ね備えた発信は大きな影響力を持つ可能性がある。[有識者]

→SNS 上で多様な発信が行われていることから、「どの媒体でどのような内容が発信されているか」といった事例を関係者間で共有する機会を設けることも有効と考えられる。[有識者]

- 既存事業者との関係などから実現には課題も想定されるが、キッチンカーも一つの可能性がある。例えば、キッチンカーをプロデュースするような役割の人がいて、様々な地域の食材を扱っているキッチンカーを呼んでくることができれば、来園者にとっては様々な食を楽しめる環境になるのではないかと。直ぐの実現は難しい面があるかもしれないが、今後の方向性の一つとして段階的に検討していく余地はある。[有識者]

→ご意見のあったキッチンカーのあり方については、今後の検討課題の一つとして位置づけ、関係者において整理していく。[園内関係機関]

→キッチンカーは、これまでも園内に広く配置され、来園者が様々な食を楽しめる環境が形成されてきたので、その延長として、キッチンカーの一層の活用を検討していくことが望まれる。[有識者]

(2)「循環：園内発生材の循環利用」について

- 協議テーマ「循環：園内発生材の循環利用」について、関連する社会動向を踏まえつつ、園内発生材の発生状況や利活用状況を把握した上で、現状と課題を整理した。論点の1つ目として、整理した園内発生材の状況及び既存の循環利用の取組、もしくはその他の利活用に関する知見を踏まえ、園内発生材の新たな循環利用の可能性は考えられないか、意見を伺いたい。また、論点の2つ目として、植物発生材を対象として、その利活用に関する提案を園内外に広く募った上で、循環利用を試行的に実施する取組を進めるのはどうか、また、その試行的取組を進めるにあたり、留意・検討すべき観点はどのようなものがあるか、意見を伺いたい。[園内関係機関]

- 公園管理の観点から近年は植物発生材の処理が大きな課題となっていると認識しているが、本公園は敷地規模が大きく、スケールメリットが見込まれる環境が前提条件として整っているため、園内の植物発生材を活用していく取組は非常に有意義である。一方で、公園全体での展開にあたっては、まず年間の発生量を把握し、発生材を落ち葉や伐採木など種類ごとに整理した上で、循環利用の目標設定を行うことで取組の方向性を明確化していく必要がある。活用方策としては、堆肥化による活用、チップ化による園内外での活用、炭化による環境価値のクレジット化などの可能性が考えられる。丸太等の大径材のベンチ等への転用は安全性の観点から持続的な活用には課題があると認識している。チップ利用が現実的な選択肢の一つと考えられるが、その需要状況について伺えればと思う。[有識者]
 - 発生量については各分類・機関ごとに整理されており、精査は必要であるものの、大まかな全体像は把握できている。[園内関係機関]
 - 園内で発生した植物発生材については、適宜チップ化し、雨水が溜まりやすい箇所への活用など再利用を進めているものの、量的には余剰が生じている状況である。[園内関係機関]

- 現在、各機関の処分・活用状況や需要の整理が進められており、「発生材のマッチング」という観点での検討も行われている。例えば、伐採木の青少年海の家での薪利用、羊毛のマリンワールドでの活用などの意見が示されている。その中で、国の維持管理業務で発生する資材を関係機関に提供する、発生材を活用した製品を販売するにあたっては法的な整理も必要と認識している。こうした整理を踏まえ、食のプロジェクトとも連動した海の中道が感じられる土産品やコンテンツの創出などにつながる展開が期待される。[園内関係機関]
 - 発生材の活用に向けては、「活用される側」と「活用する側」の双方の観点から課題を整理し、論点を明確化する必要がある。需要と供給が結びつく具体的なアイデアが、今後の取組推進に資すると考えられる。[園内関係機関]

- 発生材のマッチングについては、公園単独ではなく福岡県や福岡市といった広域的な枠組みの中で、資源を相互に融通する仕組みづくりが重要である。あわせて、将来的には無償提供にとどまらず、財源確保につながる展開も視野に入れる必要がある。また、個別利用には限界があるため、循環型の製品など、幅広い視点で活用可能性を見出していくことが必要である。循環型のビジネスに関心を持っている民間事業者は一定程度いるので、オープンな議論の場を通じてパートナーを探していく視点が有効である。[有識者]
- 活用手法としては公募方式も考えられるが、無償提供にとどまらず、園内活用の提案や地域産業との連携、環境負荷軽減等の視点を評価軸に取り入れることで、意欲ある事業者との連携が期待される。一方で、活用方策は多岐にわたるため、一度に実施するのではなく、実現可能な取組からモデル的に着手し、コストや運用負担、利用者の反応を踏まえながら段階的に展開していくことが現実的である。[有識者]
- 公募について、木質チップ等の単なる引き取りにとどまらず、活用方法の提案を含めた形で幅広くパートナーを募集する仕組みの構築を検討していきたい。[園内関係機関]
- サーキュラーエコノミーの観点からは、焼却に依存せず可能な限り再利用していくことが重要である。その意味で、肥料化が基本的な方向としつつ、焚き火用の薪としての利用も有効である場合もあるため、用途に応じた活用や、サクラやマツ等の樹種特性に応じた使い分けが求められる。あわせて、福岡市では、給食残渣を肥料化し、それを「一人一花運動」の花壇で活用する取組が行われており、資源循環と景観づくりを一体的に発信する取組が行われている。こうした活動と連携することで、循環の見える化と情報発信を図る手法も有効な方向性と考えられる。[地方公共団体]
- 資材の循環に関して国や自治体に関与する場合には、制度面で確認・整理すべき事項が生じる可能性がある。また、堆肥化においては品質や安全性の確保、成分や病原性リスクを踏まえた適切なプロセス管理も求められる。さらに、発生量や種類の把握に加え、用途ごとの需要量を見据えた整理が重要である。こうした整理により、堆肥化だけでなく他用途への活用も現実的な選択肢として検討していくことが可能となる。[有識者]

- 現時点において、堆肥としての活用や、マルチング材としての園路沿い・植栽地での利用、外部提供など多様な方向性が考えられるが、こうした取組を来園者に対して可視化していくことも重要である。園内で発生した資源が景観や体験として還元されていることを見える化すると良い。[有識者]
- 可視化の取組に関する事例や情報については、適宜持ち寄り共有できる機会を設けることが有効である。また、循環のプロセスは装置的なものになりがちのため、特に子どもも楽しめるような工夫について、国内外の事例を参照しながら検討すること

が有意義である。[有識者]

- 福岡市においては、過去に公園や街路樹の剪定で発生した資材を清掃工場に搬入しつつ、焼却に伴うコストや人手を踏まえ、公園側での活用を図る仕組みが構築された経緯がある。現状の仕組みについても教えていただきたい。[有識者]
 - 施設の老朽化等から、環境局との協議により、その仕組みは廃止に至っている。[地方公共団体]
 - 発生材の活用にあたってはコストが伴うことから、財源化につなげる仕組みの検討が一つの方向性として考えられる。例えば、福岡市等に引き取りを依頼することでコスト負担の軽減が期待される。一方で、民業圧迫への配慮や運搬距離に伴うコスト増といった課題もあるため、近隣エリアを前提とした連携が重要である。こうした点を踏まえ、国や福岡市等と連携した仕組みづくりについて検討することが有効と考えられる。[有識者]

◇各主体における将来像に向けた取組状況

- ① フクオカフラワーショーは、新聞やラジオなどでも広く取り上げられていた。フクオカフラワーショーとのタイアップ事業について、実際の反応や盛況であった状況も含めどのようなであったか伺いたい。[有識者]
 - 志賀島方面へのバス運行や志賀海神社の周遊、地元弁当の提供など地域資源を取り入れた内容が来園者から好評を得ており、公園外も含めた体験が提供された。また、フクオカフラワーショーにあわせたラッピングバスの運行により広報効果も見られたことから、公園と周辺地域の相互連携が図られた取組として好評だった。[園内関係機関]
 - フクオカフラワーショーは市として力を入れて取り組まれていたので、タイアップ事業については、今後も毎年継続的に実施していくことや複数回開催することを期待する。また、志賀海神社など関心が高まりつつある地域資源も含め発信可能な素材は多く、今回の取組を単発で終わらせず継続していくことでさらなる魅力向上につながると考えられる。[有識者]

◇全体を通じた意見

- ① 課題との関係で少し発展的な話になるが、循環に関する議論も含め、今日的に求められる国営公園の役割は従来に比べて広がりつつあり、新たに位置づけるべきテーマが増加している状況にある。一方で、現行ビジョンには十分に明記されているとは言い難い部分も見受けられる。このため、ビジョンそのものを見直す、あるいは改定を検討していくことも必要ではないかと考える。[有識者]

→現行ビジョンは概ね達成されつつあり、今後はその成果を踏まえた対外的な発信が課題である。現状、取組の発信は十分とは言えず、広報強化による機運醸成や連携拡大が期待される。また、福岡県や福岡市など周辺地域を巻き込んだ展開の余地もある。直ちに新たなビジョンを策定するのではなく、まずは現行ビジョンの評価・振り返りを行い、次のビジョンにつなげるための検討・整理期間を設けることが重要である。

[有識者]

→サーキュラーエコノミーやネイチャーポジティブの分野では、水族館をはじめとして先進的な取組が既に進められている点が強みであり、これらを体系的に整理し、パッケージとして発信していくことが重要である。あわせて、これまでの実績をビジョンに位置付けながら、今後の連携の輪を広げていくかを意識した展開を進めていくことが望まれる。[有識者]

—以上—